

## 宗教的学知の形成——仏教学を例に——

### 一、ヨーロッパ仏教学と「仏教」の誕生

一九世紀にヨーロッパ諸国で仏教学が誕生した時代は、ヨーロッパ列強がアジア諸国を植民地化していた時代であった。アジアを対象にした学術が、植民地支配と関連することは、今さら言上げる必要もないことであろう。一九世紀のヨーロッパでは、仏教へのオリエンタリズム的な憧憬があつて、ブツダを理想的な人間として描くことが多かった。ヨーロッパの社会の現実にアジアの仏教徒が存在しないだけに、テキストを通じて、仏教好きの知識人は、自由にブツダを語ることができた。まさにそれは、フィ

リップ・アーモンドが指摘するように「仏教は一九世紀前半に西洋で「発見」された」のだった。アーモンドは、つぎのように「テキスト化」の歴史があつたと述べている。

一八五〇年以降、仏教はサンスクリット、パーリの原典によつて定義される存在になつた。確かに一九世紀後半における仏教関係の第一次資料の有効性を過大評価してはならない。一八七六年にリス・デーヴィスも認めるように、刊行された資料数は少ない。しかしヴィクトリア時代のヨーロッパにおいて急増する仏教の原資料は、一八七五年以降の貴重な文献研究を可能にしたのだ……かくして一九世紀を通じて、明確に仏教の「テキスト化」の過程があつたことを認めざるを

林 淳

えない。<sup>1)</sup>

ヴィクトリア時代の学者には、自由にブッダを理想的な人間に仕立てて（イエスのような人物、詩人、宗教改革者）、あこがれ賛美する人もいた。反対に、仏教は無神論でニヒリズムの思想だと決めつけ断罪する人たちもいて、彼らは仏教を激しく批判した。ブッダにあこがれた人も、つよく批判した人も、アジアで生きている仏教徒のことを念頭に描くことはなく、西洋人こそが、正確に仏教を把握していると自負した点ではよく似ていた。<sup>2)</sup>ブッダへの憧憬のうらがわには、アジアの生きた仏教への蔑視がかくれていた。あとから成立したチベット仏教や漢訳経典は、ブッダの教えを汚辱した寄生虫のように嫌われて、ヨーロッパの図書館に保存されたテキストこそが純粋な仏教を伝えるものだと信じられた。<sup>3)</sup>言語でいうと、パリー語、サンスクリット語、漢文という序列があつて、パリー経典こそがブッダの思想に到達できる近道であると理解された。

## 二、ヨーロッパ仏教学の受容

一九世紀後半のヨーロッパの仏教学者は、大乘仏教を価値のないもの、ブッダの教えを裏切ったものと考えていた。憧憬（ブッダへの）と軽蔑（アジアの仏教徒への）が入り混じっ

ていた点で、仏教学者の態度はまさにオリエンタリズムの産物であつた。日本からヨーロッパに仏教学を学ぼうとした人たちが直面したのは、大乘仏教を蔑視したヨーロッパの権威ある仏教学者であつた。真宗大谷派から派遣された南条文雄と笠原研寿、後から南条の推薦状をもってイギリスに渡った高楠順次郎は、マックス・ミュラーのもとで仏教学を学んだ。日本の宗教学の学祖となる姉崎正治は、ドイツでドイツセン、オルデンベルグから薫陶をうけた。こうした留学生は、ヨーロッパ人の仏教に対するオリエンタリズムに直面したのであつた。

南条、笠原がロンドンに着いたときのエピソードを紹介しておきたい。ロンドンに着いた彼らは、パリー聖典協会の設立者で、著名な仏教学者であつたリス・デーヴィスに面会する機会があつた。リス・デーヴィスは、彼らにパリー語の学習を奨めた。パリー経典こそが釈迦の本当の言葉を伝えていると考えられたからである。二人は、浄土教にかかわるサンスクリット経典を学ぶための留学であつたから、その助言に従うことはなかつた。二人は、オックスフォード大学のミュラーのもとに行き、そこでサンスクリット語を学ぶようになる。最初の面会の時にミュラーが、二人に留学の目的を尋ねたが、二人は、質問にまともに答えられなかつたというエピソードがのこっている。お

そらく事実であろう。なぜなら彼らの留学は、自分から望んで来た留学ではなく、真宗大谷派という教団からの派遣であったからである。真宗大谷派としては、浄土教のサン・スクリット經典を調べることによって浄土教の起源をインドにあつたことを確認したかったのであろう。しかし浄土教はブツダの教えではないと考えていたミューラーは、日本人に向けて早く浄土教を捨ててブツダの教えに戻るよう勧めている。

この經典〔阿弥陀經―林〕は、元來ブツダが説いた教えとはことごとく異なることは、疑いもない。にもかからず日本ではもつとも人氣があつて広がっている經典なのである。国民の大多数の宗教は、この經典に基づいているといわれている。「できるだけ多く阿弥陀の名前を唱えよ。そうすればすぐに浄土へ行き安らぎが得られる」。日本人が信仰させられているのは、こういう教えである。これがブツダの説いたことだと教ええられる。この經典の一文は、もともとのブツダの教えとはまったく反しているように見える……「東洋のイングラント」になると言われてきた東洋の島国〔日本のこと〕には、偉大な未来が待ち受けている。宗教を純粹化して改革すること――即ち元來のブツダの教えの戻ること――が、何よりも先に為されなくてはな

らない。<sup>(4)</sup>

アメリカから日本に來たプロテスタントの宣教師・ゴードンは、浄土真宗の僧侶との論争で、ミューラーの論文を利用し、「日本の浄土教はブツダの教えとは違う」と論じて、浄土真宗を批判した<sup>(5)</sup>。宣教師と僧侶がはげしく論争していた時代に、ミューラーの大乗非仏説は、キリスト教宣教に有利にはたらかず、仏教側への打撃は小さくはなかつた<sup>(6)</sup>。當時の仏教的知識人は、ヨーロッパの仏教学者が説く大乗非仏説を無視することはできなくなつた。

井上円了は、仏教を信じるに足るのは三千年前に釈迦が説いたからではなく、それが哲学として優れているからだと論じた。キリスト教、儒教と比べても、仏教の方がもっとも哲学に合致し優れている。このような井上の問題の立て方に従えば、大乗仏教が仏説か非仏説かという問題は、些末なことに過ぎなくなる。井上は、ヨーロッパの仏教学者には小乗仏教の情報のみが伝わり、本來の仏教のことが知られていないとしきりに嘆いた。井上の結論では、ヨーロッパの仏教学者が説く大乗非仏説を無視し、気にする必要はないという結論になるが、それでは、ヨーロッパ仏教学の脅威を打ち消したことはない。

### 三、帝国大学と仏教系大学

1901年	東大梵語学講座
1906年	京大印度哲学史
1910年	京大梵語梵文講座
1912年	東北大学印度学講座
1917年	東大印哲講座1
1921年	東大印哲講座2
1926年	東大印哲講座3 九大印度哲学史講座

帝国大学における仏教学の講座設置

ヨーロッパ仏教学の受容先は、東大などの帝国大学の文学部であった。一八八五年より南条が東大で講義をはじめ、一九〇一年より高楠が、東大の梵語学講座の教授となった。その一方で漢訳經典の専門家であった村上專精も、東大で教鞭をとっていた。また仏教各宗派の専門学校では、江戸時代以来の宗乗・余乗の伝統は続いて、漢訳經典の読解は継続していた。パリ語、サンスクリット語の学習を中心とするヨーロッパ仏教学が一方に帝国大学でおこなわれながらも、他方で漢訳經典の研究も続いていて、両者が排他的であることはなかった。なぜならばヨーロッパ仏教学受容に貢献した南条、高楠も、浄土真宗の僧侶、篤信者であったから、大乘仏教が「本當の仏教ではない」というヨーロッパ仏教学者たちの批判に服従することはなかった。彼らは、ヨーロッパ仏教学者の文献学的手法を学びながらも、伝統的な宗派仏教が養ってきた信仰・信心を捨てるこ

とはなかった。

東大の印度哲学講座の設立が、釈宗演、安田善次郎による寄付で設立したという事実も指摘しておきたい。仏教学と仏教界は、互いに協力していく体制ができていった。一九一八年の大学令以降、龍谷大学、大谷大学、駒澤大学、立正大学などの宗門大学が設立されるが、宗門大学の教授と帝国大学の教授とが協力して、『大正新脩大藏經』を編集して、一九二八年には日本仏教学協会を創設した。

### 四、村上專精の意義

東大教授であった村上專精の大乘非仏説について検討してみよう。村上の場合、ヨーロッパ留学の経験はなく、サンスクリット語、パリ語を読むことはなかったが、漢訳經典の造詣が深かった。一九〇一年に出た村上の『仏教統一論』は、各宗派に分かれた仏教宗派が統一され、キリスト教やヨーロッパ哲学に対抗できる仏教の構築がめざされた。このなかで、村上は大乘非仏説にも言及している。歴史的な立場からブッダを人間として見るならば、大乘仏教は非仏説であるという見解である。

余は大乘非仏説なりと断定す、余は大乘非仏説と断定するも開發的仏教として信ずる者なり。<sup>(8)</sup>

村上の大乘非仏説は真宗大谷派で問題化して、村上への批判が出て、村上は、真宗大谷派の僧侶資格を失うことになる。一九〇三年に村上は『大乘仏説批判』を出版して、再度、自説を補強する。大乘が仏説か非仏説かという問題は、歴史問題であって、教理問題・信仰問題ではないことを明言して、歴史問題としては大乘非仏説であるが、教理問題・信仰問題では、大乘仏説であると述べている。<sup>9</sup>このように二つの次元を区分して、この問題の解決を図った。村上は、ヨーロッパの大乘非仏説を支持しているように見えるが、同時にそれを克服しようとしている。一見するとミューラーと同じことを言っているように思われるが、教理・信仰の問題から見ると、大乘仏教は仏説だと大胆に肯定している。大乘非仏説と大乘仏説を両立させうる説明原理を作り上げた点に、村上の真骨頂があると評価してもよいであろう。学者でありながらも同時に僧侶であるという日本の仏教学者の二面性が、村上の説明原理を生み出す母体であり、ひろい支持を得た要因であった。大乘仏教は「開発的仏教」であって、小乗仏教よりはるかに価値のある存在であると断言することで、村上は、ヨーロッパ仏教を相対化することに成功した。

村上の学術的な貢献は、それだけではない。ヨーロッパ仏教学と一線をひいた「仏教史学」という新たな分野を創

設し定着させたことでも、学問史上の意味は大きい。村上は、境野黄洋、鷲尾順敬とともに『仏教史林』という雑誌を刊行し、ヨーロッパの仏教学とも伝統的な宗乗・余乗とも一線を画した、仏教教理を対象にした「仏教史学」を立ち上げた。彼らの「仏教史学」は、歴史的方法を用い各宗派の教理を公平にまとめあげ、包括的な総合性を得ることによって、各宗派の宗乗に対して学術的な優位を誇示することができた。それはまた、仏教を国別に叙述するスタイルを作り出したのであった。

日本の国史は材料の上より公平の観察を下せば、三分中の一は仏教史を以て填めざるへからすと、是を以て、読者は国家の為に仏教史攷究の要務なると共に亦以て仏教史編成の容易からざることを思ふへし。<sup>10</sup>

仏教の歴史はインド、中国、日本と国別の仏教史に分割されて叙述されることになった。日本仏教史は国史の一分野となつて、国家への忠義心を養うことが目的と考えられた。日本仏教がインド仏教や中国仏教と異なることは、国家の歴史や国民性が違う以上、当然な結果であつて優劣の比較は意味をなさない。村上たちの提唱は、それ以降、辻善之助『日本仏教史之研究』、さらに『支那仏教史学』、『日本仏教史学』として結実していった。<sup>11</sup>『支那仏教史学』の発刊に際して、道端良秀が書いた文章を引用してみよう。

彼の村上專精が『仏教統一論』其他を出して、ここに  
仏教研究方法に一の史学的方法を強調し、ここに仏教  
学界に一大衝撃を与へてより、己に四十年に垂んとし  
て居る、其の間に於いて博士の『仏教史林』の刊行と  
なり、その門下鷺尾博士等の『仏教史学』の継統と  
なつて現はれたのであつたが、何れも三年程にて廃刊  
となつてしまつたのは、何と云つても惜しいことであ  
る。併し乍これらの学界に与へた功績は実に偉大なも  
のと言はねばならぬ……：仏教の研究に、それが教理で  
あれ、信仰であれ、美術であれ、文学であれ、如何な  
る方面に於いても、歴史性を離れた研究は、全く価値  
のなきものと断言してもいい。

仏教学から生れた仏教史学は、歴史学の一分野として展開  
して、日本史学者、東洋史学者によって担われていった。  
その流れのなかで戦時中には、国別の仏教史学、とりわけ  
日本仏教史学は、ナシヨナリズムの発揚の役割を演じたこ  
とがあつた。

## 五、補助線としての宗教学

ヨーロッパでは宗教学のはじまりがミューラーを学祖と  
して今も語られているように、日本でも仏教学と宗教学と

は重複していた。宗教学の創設者・姉崎正治も、ドイツで  
ドイッセン、オルテンベルグに仏教学を学び、インド仏教  
を専門にしていた。しかし帰国して東大の宗教学の教授と  
なると、しだいにインド仏教からキリシタン、聖徳太子、  
日蓮などの日本宗教史へと専門を転換させた。姉崎の弟子  
からは、ヨーロッパ仏教学を学ぶ人は現われず、主に民族  
学、社会学、神道研究を専門にした研究者が活躍した。植  
民地の宗教調査において、宇野円空、赤松智城、古野清人  
などの宗教学者が調査に参加した。

戦前の国家神道体制下では、政府が「神社は宗教にあら  
ず」という公式見解を繰り返していたので、宗教の定義、  
神道の定義が政治的な問題として浮上する可能性はいつも  
あつた。神職界、宗教学のなかには、神道は宗教だと唱え  
る見解は少なくなかつた。政府は、神社神道への崇敬と信  
教の自由を両立させるために、「神社は宗教にあらず」と  
いう見解をとつた。「神社は宗教にあらず」と語る時に、  
「宗教」とは何かの説明も同時に必要であつた。戦前にお  
ける「宗教」は、キリスト教、仏教、教派神道の三つで  
あつた。宗教学者は、歴史的由来も世界観も異質な三つの  
宗教を「宗教」であると保証し、さらに一九一二年の三教  
会同のように三教の調整にあたることがあつた。何が宗教  
で、何が宗教ではないかという議論が、学術の問題を超え

で政治的な問題になる可能性があった点で、宗教学は公的な役割を担わざるをえなかった。

## 六、まとめ

第一に、日本の知識人は、テキスト中心のヨーロッパ仏教学を撰取したが、それによって江戸時代以来の宗乗・余乗を手放すことはなかった。大乘非仏説と大乘仏説との両立は、仏教学者が同時に宗派の僧侶であるという日本の状況によって要請されたものであった。ヨーロッパからの仏教学、各宗派の宗乗・余乗、そして村上たちが提唱した仏教史学が共存し、仏教をめぐる分野を形成した。

第二に、当初は一体化していた宗教学と仏教学が分離し、しだいに仏教学が宗教学から独立した。この分離は、仏教界が仏教学の制度的な独立を念願したためであった。仏教学と分離した宗教学は、日本宗教史やアジアの宗教を対象にしたワールドワークの学術に変化した。戦前における植民地の宗教調査、「宗教」の定義の専門家であったことによって、宗教学者は、公的な役割を演じる場面を与えられていた。

## 注

- (1) Almond, Philip. *The British Discovery of Buddhism*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988, p. 26.
- (2) *ibid.*, p. 117.
- (3) Lopez, Donald. *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West*. Chicago: The University of Chicago Press, 1998, p. 37.
- (4) Muller, Max. *Selected Essays on Language, Mythology and Religion*. London: Longman, Green and Co., 1881, pp. 365-366.
- (5) 指方伊織「M・L・ゴードンの大乗非仏説——宣教師がもたらした近代仏教学」『近代仏教』一五号、二〇〇八年。
- (6) Thelle, Notto. *Buddhism and Christianity in Japan: From Conflict to Dialogue 1854-1899*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1987, p. 69.
- (7) 林淳「近代日本における仏教学と宗教学」『宗教研究』三三三三号、二〇〇二年。同「宗教学と宗教学」『季刊日本思想史』七二号、二〇〇八年。
- (8) 村上専精『新編仏教統一論』群書、一九九七年、一七五頁（原著『仏教統一論 第一編 大綱論』金港堂書籍、一九〇一年）。
- (9) 村上専精『大乘仏説論批判』光融館出版、一九〇三年、七頁。

- (10) 村上專精「仏教史研究の必要を述べて發刊の由来となし併せて本誌の主義目的を表白す」『仏教史林』第一編第一号、一八九四年。
- (11) オリオン・クラウタウ「〈日本仏教〉の誕生——村上專精とその学問的営為を中心に」(『日本思想史研究』第四二号、二〇一〇年)。
- (12) 道端良秀「本誌發刊に就いて」『支那仏教史学』第一卷第一号、一九三七年。

(愛知学院大学教授)